

2023年6月4日（日）三位一体主日朝礼拝説教

『神が清めたものを』井上隆晶牧師

使徒言行録10章6～20節、ヨハネ福音書13章3～10節

①【ユダヤ人のバランスを失った信仰】

使徒言行録10章には、ローマの百人隊長コルネリウスの救いの記事が書かれています。この出来事により、教会は大きく方向転換をしました。それほど大きな出来事だったのだと思います。ユダヤ人は私たちが想像する以上に、外国人との交わりを拒んでいました。外国人に触れたら、彼らの汚れが自分たちに移ると思って忌み嫌っていたのです。それは徹底していました。自分を清く保つために、彼らはたくさんの規則を作ったのです。

●神戸のシナゴークに行くと、巨大な冷蔵庫があり、その中には政府が許可した食べ物が冷凍保存されています。許可していない物を食べると汚れるからです。また階段のついた大きな水槽があり、彼らはその中で沐浴をして自分を清めます。イスラムのモスクの地下には足を洗う洗い場がずらっと並んでいます。これらは彼らが、いかに自分の清さを保つことに熱心であるかを教えています。

主イエス様は、そういうあり方を大胆に改革していきました。病人に手を置き、安息日に病気を癒し、罪人たちと交わりました。イエス様は退いて自分を守ろうとしたのではなく、出かけて行って人と交わったのです。そして自分の弟子たちにも「使徒」という名前をつけて、出かけて行くように命じられました。しかし出かける前には、まず退いて神と交わり祈るという生活も大事になさいました。このバランスが大事なのです。ユダヤ人は退くだけという、バランスを崩した信仰だったのです。そこに問題がありました。

②【祈りを通して神は私たちに触れられる】

コルネリウスはローマ人でしたが、彼は熱心な信仰者でした。彼の祈りと施し（隣人愛の実践）が神に届いていたというのですから、素晴らしい信者であると言ってよいと思います。彼は午後三時の祈りの時に、天使からペトロを招くように言われ、使いを出しました。しかし、それだけでは、使いがシモンの家に行っても、ペトロは決して外国人であるコルネリウスの家には行くことはなかったでしょう。外国人と交わるなどずっと教えられてきたからです。そのペトロに、主は昼の十二時の祈りの時に、あらゆる獣や鳥が入った大きな布が天から下ってくるという幻を見せ、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」（15節）と三回語りかけられました。そのことを思い巡らしているところへ、コルネリウスからの使いが来たのです。それで、ペトロは何のわだかまりもなく彼らを家に迎え入れたのです。非常に硬いきたりというものが、こうして自然に破れました。もしそのような神の導きがなかったとしたら、そのきたりは決して破

れなかったに違いありません。神との交わりが、そのかたい物を自然にとかしたのです。コルネリウスもペトロも祈りの時に、神からのお告げを聞きます。祈りは神が私たちの世界に入って来る入り口であって、神の国の扉を開く門なのです。祈りはこの世と神の国をつなぐ方法です。神は祈りを通してあなたに語られ、あなたの中に入って来られます。だから祈っている人は天とつながっており、どこか天の香りがします。天の香りとは神の香りです。祈りの時に神が触れるのでしょうね。だから人は変わるのです。

③【人を清めるのは神である】

神様はペトロに「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」といわれました。この言葉から分かるのは、人を清くするのは神であって人間ではないということです。人間はどんなに修行しても、どんなに節制しても清くならないのです。人は神によって一方的に清められるのです。だから神の業であって、サクラメント（聖礼典）です。このことが分かるのが「洗足」です。ペトロはイエス様に足を洗ってもらう時に「わたしの足など、決して洗わないでください。」（ヨハネ 13：8）といいました。するとイエス様は「もし私があなたを洗わないなら、あなたは私と何のかかわりもないことになる。」といわれました。カルト宗教では人間が神様のために多額の献金をし、ノルマを達成しなければ清くなられませんが、キリスト教はまったく違うのです。人間が頑張って何かをするのではなくて、神様に一方的に自分の汚れを洗ってもらうのです。汚れたままの全身をイエス様の手に委ねるのです。それだけでいいのです。それが救いだなんて何という単純さだろうと思います。子供のようにならなければ天国に入れないというのはそういうことです。

●明治から昭和にかけて活躍した小説家の正宗白鳥は、若い時に洗礼を受けましたが、信仰から離れてしまいます。しかしすい臓がんになって入院してから、「私は単純になりました。信じます。従います。」とあって 83 歳で再び神を受け入れ、平安にこの世を去りました。信仰は単純になることです。

④【神を賛美することが聖霊のしるし】

ペトロがコルネリウスの家で、イエス様のなさった偉大な業を語ると、外国人の上に聖霊が降りました。「異邦人が異言を話し、また神を賛美しているのを、聞いたからである。」（使徒 10：46）とあります。当時は聖霊が降ったしるしは異言と賛美でした。異言はだんだんとパウロによって教会から退けられるのですが、賛美は今でも有効です。神を賛美する、神を褒めたたえる、神を喜ぶという事です。これは信じていなければできないことです。神を喜び、キリストがして下さったことを喜ぶことが聖霊降臨のしるしなのです。

●榎本保郎牧師はこんなことを書いています。「私たちは人と比べて自分は優れていると思って安心しようとする。…聖書は、人と比較して安心するのではなく、神の憐れみによって安心していけと教えている。…」「私たちの不安や恐れは、みな意識するとしなやかにかかわらず、神の怒りへの不安、恐れである。それゆえ、神が私たちの罪を赦して下さり、愛して下さっていることを心の底から知るなら、私たちはそれほど明日を心配しなくなる。」

先日、奈良県大和郡山市の町家の屋根裏部屋から「マリア観音」が見つかったとTVで報道していました。重要文化財に相当する貴重なものだそうです。長崎で迫害されたキリシタンたちが全国に逃げて来た時に、持っていたものであろうと言われています。キリシタンたちは何があっても信仰を捨てませんでした。なぜ彼らは迫害に耐えられたのでしょうか。それは彼らがこの世の人を見ないで、天の神様だけを見ていたからです。最近、いろいろな事件が起こります。ジャニーズ事務所の事件、200人以上が亡くなった中国の列車事故、殺人は毎日のように起こり嫌になります。長野県の中野市で起こった、4人を殺害した猟銃事件。容疑者の青年は「悪口を言われたと思った」というんです。人を見ると絶望します。

私たちの心が暗く、重くなる時というのは人に期待するからです。「あの人は～だ、この人は～をしてくれない」と人に期待し、その期待したものが与えられないので暗くなるのです。人に期待している時は、神に期待していません。「**人間に頼るのをやめよ。鼻で息をしているだけの者に。**」(イザヤ 2:22)とあります。人は変わりません。しかし聖霊を受けた者は一瞬で変わります。迫害者サウロは光を受けてキリスト信者になりました。劣等感と恐れのもやみだった弟子たちは聖霊を受けて、伝道者に変えられました。聖霊は一瞬にして人を変える力を持っています。神に、キリストに、聖霊に期待しましょう。心を天に向けましょう。そうすると心が楽になり、晴れやかになるのです。私たちキリスト教徒の使命は、どんな時も地の中に天を入れてゆくことです。この世のどんな確かに見えるものよりも、イエス様の愛の方が確かであると見えてくる時、私たちは何も恐れなくなるのです。その時、私たちは軽やかな足取りで人生を歩むことができるのです。